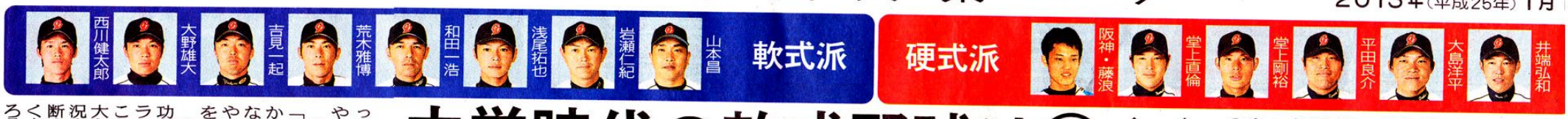
中日スポーツ　２０１３年１月１５日掲載

(第3種郵便物認可)　中日スポーツ　2013年(平成25年)1月



中学時代の軟式野球は◯？×？

148勝、138セーブの大野豊氏が、野球殿堂入りを果たした。ドラフト外入団では初の快挙。出雲市信用組合では軟式野球をやっていたのは有名なエピソードだ。

プロの「球歴」について書く。井端、大島、平田に堂上兄弟らが「経験者」。山本昌、岩瀬、浅尾、和田、荒木、吉見らは「未経験者」。これは中学時代に硬式野球の経験の有無だ。

「僕なら軟式をお勧めします。硬式は体の小さい子には負担がかかるし、大きい子なら上体の力に任せて投げる悪い癖がついてしまうので」

中学野球の選択について、中日のあるスカウトの言葉だ。少なくともプロ目線では硬式野球のスタートが遅くなることに、何の問題もない。ただ、部活動の軟式野球にも大きな障害はある。スカウトは言葉を続けた。

「あらゆる競技で学校の中に指導できる先生が減っています。だから野球なら硬式にいく。しっかりした野球を学べますから。僕も投手ではなく野手なら、硬式を勧めるかもしれません。ただ、こちらは週末だけのチームが多いんですよね…」

しっかりした指導者に軟式野球を教わるのが理想なのだろうが、多くの現実は毎日のんびり軟式をやるか、週末だけ高度な硬式をやるかの選択だ。今度は中田宗男スカウト部長に尋ねてみた。

「将来、野球を職業にしたいのなら早く硬球を握らない方がいいやろね。高校入学後に（硬式経験者より）遅れるのは事実だけど、入ってからでも間に合う。変なクセがつくよりもいい。プロでも伸び悩むのは、そういう変なクセがついてしまっている選手だから」

新人の合同トレーニングを見ながらの会話だった。今年の7人の新人のうち、軟式出身者は3人。中田部長は「知らなかった」が、その3人が誰であるかはすぐにわかった。4位の杉山翔大、5位の溝脇隼人、6位の井上公志。キャッチボールの握りを見れば、ある程度の判断がつくそうだ。

「投手、野手にかかわらず早くから硬球を握っている子は握りが硬いよね。軟式出身者は軽やかでスピンが利いている」

典型例として「硬式育ち」が阪神・藤浪、「軟式育ち」は西川を挙げた。選手はどうなのかと言えば、大野は「高校でもハンディは感じなかったし、もう一回やり直すとしても軟式をやります」と言い切った。浅尾も「中学で硬球を握る負担はかなりあると思う」と軟式派だ。

ただ、スカウトにせよ現役にせよ、結局は成功者の目線ではある。強豪校で甲子園とレギュラーを目指すなら、入学時に硬球に慣れていることは大きなアドバンテージとなる。体や手の大きさ、筋力、チームの指導者、家庭の経済状況を考えて…。野球に限らず、人生は選択と決断の連続だ。その結果、大野氏のように突如咲く大輪の花に、人々は共感を覚えたりするのだろう。

中日スポーツに非常に興味深い記事が記載してありましたので紹介します。

常日頃皆さんにお伝えしている事がまさにここに掲載された内容そのものであると感じました。

是非ご一読下さい

メントーズの方針もここにあるとお伝えします。